

忠義

芥川龍之介

青空文庫

一 前島林右衛門

板倉修理は、病後の疲労が稍恢復すると同時に、はげしい神経衰弱に襲われた。――

肩がはる。頭痛がする。日頃好んでする書見にさえ、身がはいらない。廊下を通る人の足音とか、家中の者の話声とかが聞えただけで、すぐ注意が擾されてしまう。それがだんだん嵩じて来ると、今度は極些細な刺戟からも、絶えず神経を虐まれるような姿になった。

第一、蓑盆の蒔絵などが、黒地に金の唐草を這わせていると、その細い蔓や葉がどうも気になって仕方がない。そのほか象牙の箸とか、青銅の火箸とか云う先の尖った物を見ても、やはり不安になって来る。しまいには、畳の縁の交叉した角や、天井の四隅までが、丁度刃物を見つめている時のような切ない神経の緊張を、感じさせるようになった。修理は、止むを得ず、毎日陰気な顔をして、じっと居間にいすくまっていた。何をどうするのも苦しい。出来る事なら、このまま存在の意識もなくなしてしまいたいと思う事が、

度々ある。が、それは、ささくれた神経の方で、許さない。彼は、蟻地獄ありじごくに落ちた蟻のような、いら立たしい心で、彼の周囲を見まわした。しかも、そこにあるのは、彼の心もちに何の理解もない、徒に万いたずら一を惧おそれている「譜代ふだいの臣」ばかりである。「己おれは苦しんでいる。が、誰も己の苦しみを察してくれるものがない。」——そう思う事が、既に彼には一倍の苦痛であつた。

修理の神経衰弱は、この周囲の無理解のために、一層昂進の度を早めたらしい。彼は、事毎ことごとに興奮した。隣屋敷まで聞えそうな声で、わめき立てた事も一再ではない。刀かたなか

架けの刀に手のかかった事も、度々ある。そう云う時の彼はほとんど誰の眼にも、別人のようになつてしまう。ふだん黄いろく肉の落ちた顔が、どこと云う事なく痙攣けいれんして眼の色まで妙に殺氣立つて来る。そうして、発作ほつさが甚しくなると、必ず左右の鬢びんの毛を、ふるえる両手で、かきむしり始める。——近習きんじゆの者は、皆この鬢をむしるのを、彼の逆上した索引さくいんにした。そう云う時には、互に警め合つて、誰も彼の側へ近づくものがない。

発狂——こう云う怖れは、修理自身にもあつた。周囲が、それを感じていたのは云うまでもない。修理は勿論、この周囲の持つている怖れには反感を抱いている。しかし彼自身の感ずる怖れには、始めから反抗のしようがない。彼は、発作が止んで、前よりも一層幽

鬱な心が重く頭を圧して来ると、時としてこの怖れが、稲妻のように、己を脅かすの意識した。そうして、同時にまた、そう云う怖れを抱くことが、既に発狂の予告のような、不吉な不安にさえ、襲われた。「発狂したらどうする。」

——そう思うと、彼は、俄に眼の前が、暗くなるような心もちがした。

勿論この怖れは、一方絶えず、外界の刺戟から来るいら立たしさに、かき消された。が、そのいら立たしさがまた、他方では、ややもすると、この怖れを眼ざめさせた。——云わば、修理の心は、自分の尾を追いかける猫のように、休みなく、不安から不安へと、廻転していたのである。

修理しゆりのこの逆上は、少からず一家中の憂慮する所となつた。中でも、これがために最も心を労したのは、家老の前島林右衛門である。

林右衛門は、家老と云つても、実は本家の板倉式部いたくらしきぶから、附人つけびととして来ているので、修理も彼には、日頃から一いち目置もくいていた。これはほとんど病苦と云うものの経験のない、

赭^{あか}ら顔の大男で、文武の両道^{ひい}に秀でている点では、家中^{かちゆう}の侍で、彼の右に出るものは、幾人もない。そう云う関係上、彼はこれまで、始終修理に対して、意見番の役を勤めていた。彼が「板倉家の大久保彦左^{おおくぼひこざ}」などと呼ばれていたのも、完^{まった}くこの忠^{ちゆう}諫^{かん}を進める所から来た渾名^{あだな}である。

林右衛門は、修理の逆上^{わざう}が眼に見えて、進み出して以来、夜の目も寝ないくらい、主家のために、心を煩^{わづら}わした。——既に病氣^{びようかん}が本復した以上、修理は近日中に病^{びよう}緩^{かん}の御礼として、登城^{とじやう}しなければならぬ筈である。所が、この逆上では、登城の際、附合^{つきあい}の諸大名、座席同列の旗本仲間へ、どんな無礼を働くか知れたものではない。万一それから刃傷沙汰^{にんじやうざた}にでもなつた日には、板倉家七千石は、そのまま「お取りつぶし」になつてしまふ。殷鑑^{いんかん}は遠からず、堀田稻葉^{ほつたいなば}の喧嘩^{けんか}にあるではないか。

林右衛門は、こう思うと、居ても立つても、いられないような心もちがした。しかし彼に云わせると、逆上は「体の病」ではない。全く「心の病」である——彼はそこで、放肆^{ほうし}を諫^{いさ}めたり、奢侈^{しゃし}を諫^{いさ}めたりするのと同じように、敢然として、修理の神経衰弱を諫めようとした。

だから、林右衛門は、爾来^{じらい}、機会さえあれば修理に苦諫^{くかん}を進めた。が、修理の逆上は、

少しも鎮まるけはいがない。寧ろ、諫めれば諫めるほど、焦れば焦れるほど、眼に見えて、進んで来る。現に一度などは、危く林右衛門を手討ちにさえ、しようとした。「主を主とも思わぬ奴じや。本家の手前さえなくば、切つてすてようものを。」——そう云う修理の眼の中にあつたものは、既に怒りばかりではない。林右衛門は、そこに、また消し難い憎しみの色をも、読んだのである。

その中に、主従の間に纏綿する感情は、林右衛門の重ねる苦諫に従つて、いつとなく荒んで来た。と云うのは、独り修理が林右衛門を憎むようになったと云うばかりではない。林右衛門の心にもまた、知らず知らず、修理に対する憎しみが、芽をふいて来た事を云うのである。勿論、彼は、この憎しみを意識してはいなかった。少くとも、最後の一刻を除いて、修理に対する彼の忠心は、終始変らないものと信じていた。「君君為らざれば、臣臣為らず」——これは孟子の「道」だったばかりではない。その後には、人間の自然の「道」がある。しかし、林右衛門は、それを認めようとしなかった。……

彼は、飽くまでも、臣節を尽そうとした。が、苦諫の効がない事は、既に苦い経験を嘗めていた。そこで、彼は、今まで胸中に秘していた、最後の手段に訴える覚悟をした。最後の手段と云うのは、ほかでもない。修理を押込め隠居にして、板倉一族の中から養子を

むかえようと云うのである。――

何よりもまず、「家」である。（林右衛門はこう思った。）当主は「家」の前に、犠牲にしなければならぬ。ことに、板倉本家は、乃祖板倉四郎左衛門勝重以来、未嘗、瑕瑾を受けた事のない名家である。二代又左衛門重宗が、父の跡をうけて、所司代として令聞があつたのは、数えるまでもない。その弟の主水重昌は、慶長十九年大阪冬の陣の和が講ぜられた時に、判元見届の重任を辱くしたのを始めとして、寛永十四年島原の乱に際しては西国の軍に将として、將軍家御名代の旗を、天草征伐の陣中に翻した。その名家に、万一汚辱を蒙らせるような事があつたならば、どうしよう。臣子の分として、九原の下、板倉家累代の父祖に見ゆべき顔は、どこにもない。

こう思つた林右衛門は、私に一族の中を物色した。すると幸い、当時若年寄を勤めてゐる板倉佐渡守には、部屋住の子息が三人ある。その子息の一人を跡目にして、養子願さえすれば、公辺の首尾は、どうにでもなろう。もつともこれは、事件の性質上修理や修理の内室には、密々で行わなければならない。彼は、ここまで思案をめぐらした時に、始めて、明るみへ出たような心もちがした。そうして、それと同時に今までに覚えなかつたある悲しみが、おのずからその心もちを曇らせようとするのが、感じられた。「皆御家の

ためじや。」——そう云う彼の決心の中には、彼自身臙げにしか意識しない、何ものかを弁護しようとするある努力が、月の暈のようにそれとなく、つきまどっていたからである。

病弱な修理は、第一に、林右衛門の頑健な体を憎んだ。それから、本家の附人として、彼が陰に持っている権柄を憎んだ。最後に、彼の「家」を中心とする忠義を憎んだ。

「主を主とも思わぬ奴じや。」——こう云う修理の語の中には、これらの憎しみが、燻りながら燃える火のように、暗い焰を蔵していたのである。

そこへ、突然、思いがけない非謀が、内室の口によつて伝えられた。林右衛門は修理を押し込め隠居にして、板倉佐渡守の子息を養子に迎えようとする。それが、偶然、内室の耳へ洩れた。——これを聞いた修理が、眦を裂いて憤つたのは無理もない。

成程、林右衛門は、板倉家を大事に思うかも知れない。が、忠義と云うものは現在仕えている主人を蔑にしてまでも、「家」のために計るべきものであろうか。しかも、林右衛門の「家」を憂えるのは、杞憂と云えば杞憂である。彼はその杞憂のために、自分を押し込

め隠居にしようとした。あるいはその物々しい忠義呼わりの後に、あわよくば、家を横領しようとする野心でもあるのかも知れない。——そう思うと修理は、どんな酷刑でも、この不臣の行を罰するには、軽すぎるように思われた。

彼は、内室からこの話を聞くと、すぐに、以前彼の乳人を勤めていた、田中宇左衛門という老人を呼んで、こう言つた。

「林右衛門めを縛り首にせい。」

宇左衛門は、半白の頭を傾けた。年よりもふけた、彼の顔は、この頃の心労で一層皺を増している。——林右衛門の企ては、彼も快くは思っていない。が、何と云つても相手は本家からの附人である。

「縛り首は穩便でございますまい。武士らしく切腹でも申しつけまするならば、格別でございます。」

修理はこれを聞くと、嘲笑うような眼で、宇左衛門を見た。そうして、二三度強く頭を振つた。

「いや人でなし奴に、切腹を申しつける廉はない。縛り首にせい。縛り首にじゃ。」
が、そう云いながら、どうしたのか、彼は、血の色のない頬へ、はらはらと涙を落した。

そうして、それから——いつものように両手で、鬢びんの毛をかきむしり始めた。

縛り首にしろと云う命が出た事は、直ただちに腹心の近習きんじゆから、林右衛門に伝えられた。

「よいわ。この上は、林右衛門も意地こまぬづくじや。手を拱こまぬいて縛り首もうたれまい。」

彼は昂然として、こう云った。そうして、今まで彼につきまといていた得体えたいの知れない不安が、この沙汰を聞くと同時に、跡方なく消えてしまふのを意識した。今の彼の心にあるものは、修理に対するあからさまな憎しみである。もう修理は、彼にとつて、主人ではない。その修理を憎むのに、何の憚はばかる所があるう。——彼の心の明るくなったのは、無意識ながら、全く彼がこう云う論理を、剎那せつなの間に認めたからである。

そこで、彼は、妻子家来を引き具して、白昼、修理の屋敷を立ち退のいた。作法さほう通り、立ち退き先の所書きは、座敷の壁に貼はつてある。槍やりも、林右衛門自ら、小腋こわきにして、先に立つた。武具を担になったり、足弱を扶たすけたりしている若党草履取ぞうりを加えても、一行の人数にんずは、漸く十人にすぎない。それが、とり乱した気色もなく、つれ立って、門を出た。

延享四年三月の末である。門の外では、生暖い風が、桜の花と砂埃とを、一つに武者窓へふきつけている。林右衛門は、その風の中に立って、もう一応、往來の右左を見廻した。そうして、それから檜で、一同に左へ行けと相図をした。

二 田中宇左衛門

林右衛門の立ち退いた後は、田中宇左衛門が代つて、家老を勤めた。彼は乳人をしていた關係上、修理を見る眼が、自らほかの家來とはちがっている。彼は親のような心もちで、修理の逆上をいたわった。修理もまた、彼にだけは、比較的従順に振舞つたらしい。そこで、主従の關係は、林右衛門のいた時から見ると、遙に滑になつて來た。

宇左衛門は、修理の発作が、夏が來ると共に、漸く怠り出したのを喜んだ。彼も万一修理が殿中で無礼を働きはしないかと云う事を、惧れない訳ではない。が、林右衛門は、それを「家」に関する大事として、惧れた。併し、彼は、それを「主」に関する大事として惧れたのである。

勿論、「家」と云う事も、彼の念頭には上つていた。が、變があるにしてもそれは単に、

「家」を亡すが故に、大事なのではない。「主」^{しゆう}をして、「家」を亡さしむるが故に——「主」^{しゆう}をして、不孝の名を負わしむるが故に、大事なのである。では、その大事を未然^{みぜん}に防ぐには、どうしたら、いいであろうか。この点になると、宇左衛門は林右衛門ほど明瞭な、意見を持つていないようであつた。恐らく彼は、神明の加護と自分の赤誠とで、修理の逆上の鎮まるように祈るよりほかは、なかつたのであろう。

その年の八月一日、徳川幕府では、所謂^{いわゆる}八朔^{はつさく}の儀式を行う日に、修理は病後初めての出仕^{しゆつし}をした。そうして、その序^{ついで}に、当時^{にしまる}西丸にいた、若年寄の板倉佐渡守を訪うて、帰宅した。が、別に殿中では、何も粗^{そそ}をしなかつたらしい。宇左衛門は、始めて、愁^{しゆう}眉^びを開く事が出来るような心もちがした。

しかし、彼の悦びは、その日一日だけでも、続かなかつた。夜^{よる}になると間もなく、板倉佐渡守から急な使があつて、早速来るようにと云う沙汰^{きようちよう}が、凶^{きよう}兆^{ちよう}のように彼^{おびやか}を脅したからである。夜陰に及んで、突然召しを受ける。——そう云う事は、林右衛門の代から、まだ一度も聞いた事がない。しかも今日は、初めて修理が登城をした日である。——宇左衛門は、不吉な予感に襲われながら、慌^{あわただ}しく佐渡守の屋敷へ参候した。

すると、果して、修理が佐渡守に無礼の振舞があつたと云う話である。——今日出仕を

終つてから、修理は、白帷子しろかたびらに長上下ながかみしものままで、西丸の佐渡守を訪れた。見た所、顔か色いろもすぐれないようだから、あるいはまだ快癒がはかばかしくないのかと思つたが、話して見ると、格別、病人らしい容子ようすもない。そこで安心して、暫く世間話をしてる中に、偶然、佐渡守が、いつものように前島林右衛門の安否を訊ねた。すると、修理は急に額を暗くして、「林右衛門めは、先頃さきころ、手前屋敷を駈落ちかけお致してござる。」と云う。林右衛門が、どう云う人間かと云う事は、佐渡守もよく知つてゐる。何か仔細しさいがなくては、妄みだりに主家を駈落ちなどする男ではない。こう思つたから、佐渡守は、その仔細を尋ねると同時に、本家からの附人つけびとにどう云う間違いが起つても、親類中へ相談なり、知らせなりしないのは、穩おだやかでない旨を忠告した。ところが、修理は、これを聞くと、眼の色を変えながら、刀の柄つかへ手をかけて、「佐渡守殿は、別して、林右衛門めを鼻肩ひいきにせられるようでござるが、手前家来の仕置は、不肖ながら手前一存で取計らい申す。如何に当時出頭しゅつとうの若年寄でも、いらぬ世話はお置きなされい。」と云う口上である。そこでさすがの佐渡守も、あまりの事に呆あきれ返つて、御用繁多を幸に、早速その場を外はずしてしまつた。――

「よいか。」ここまで話して来て、佐渡守は、今更のように、苦い顔をした。

――第一に、林右衛門の立ち退いた趣を、一門衆へ通達しないのは、宇左衛門の罪であ

る。第二に、まだ逆上の気味のある修理を、登城させたのも、やはり彼の責を免れない。佐渡守だったから、いいが、もし今日のような雑言ぞうごんを、列座の大名衆にでも云ったとしたら、板倉家七千石は、忽ちたちま、改易かいえきになつてしまう。――

「そこでじゃ。今後は必ずしも、他出無用に致すように、別して、出仕登城の儀は、その方より、堅くさし止むるがよい。」

佐渡守は、こう云つて、じろりと宇左衛門を見た。

「唯だ主たしゆうにつれて、その方まで逆上しそうなものが、心配じゃ。よいか。きっと申しつけたぞ。」

宇左衛門は眉をひそめながら、思切つた声で答えた。

「よろしゅうござりまする、しかと向後こうごは慎むでございましょう。」

「おお、二度と過あやまちをせぬのが、何よりじゃ。」

佐渡守は、吐き出すように、こう云つた。

「その儀は、宇左衛門、一命にかけて、承知仕りました。」

彼は、眼に涙をためながら懇願するように、佐渡守を見た。が、その眼の中には、哀あいれ憐れんを請う情と共に、犯し難い決心の色が、浮んでいる。――必ず修理の他出を、禁ずる

事が出来ると云う決心ではない。禁ずる事が出来なかつたら、どうすると云う、決心である。

佐渡守は、これを見ると、また顔をしかめながら、面倒臭そうに、横を向いた。

「主」の意に従えば、「家」が危い。「家」を立てようとすれば、「主」の意に悖る事になる。嘗は、林右衛門も、この苦境に陥っていた。が、彼には「家」のために「主」を捨てる勇氣がある。と云うよりは、むしろ、始からそれほど「主」を大事に思っていない。だから、彼は、容易く、「家」のために「主」を犠牲にした。

しかし、自分には、それが出来ない。自分は、「家」の利害だけを計るには、余りに「主」に親しみすぎている。「家」のために、ただ、「家」と云う名のために、どうして、現在の「主」を無理に隠居などさせられよう。自分の眼から見れば、今の修理も、破魔弓こそ持たないものの、幼少の修理と変りがない。自分が絵解きをした絵本、自分が手をとって習わせた難波津の歌、それから、自分が尾をつけた紙鳶——そう云う物も、まぎ

まざと、自分の記憶に残っている。……

そうかと云つて、「主」をそのままにして置けば、独り「家」が亡びるだけではない。

「主」自身にも凶事が起りそうである。利害の打算から云えば、林右衛門のつた策は、唯一の、そうしてまた、最も賢明なものに相違ない。自分も、それは認めている。その癖、それが、自分には、どうしても実行する事が出来ないのである。

遠くで稲妻のする空の下を、修理の屋敷へ帰りながら、宇左衛門は悄然と腕を組んで、こんな事を何度となく胸の中で繰り返した。

修理は、翌日、宇左衛門から、佐渡守の云い渡した一部始終を聞くと、忽ち顔を曇らせた。が、それぎりで、格別いつものように、とり上げる気色もない。宇左衛門は、気づかしながら、幾分か安堵して、その日はそのまま、下つて来た。

それから、かれこれ十日ばかりの間、修理は、居間にとじこもって、毎日ぼんやり考え事に耽っていた。宇左衛門の顔を見ても、口を利かない。いや、ただ一度、小雨のふる日

に、時ほととぎす鳥の啼く声を聞いて、「あれは鶯の巢をぬすむそうじやな。」とつぶやいた事がある。その時でさえ、宇左衛門が、それを潮しほに、話しかけたが、彼は、また黙って、うす暗い空へ眼をやつてしまった。そのほかは、勿論、唾おしのように口をつぐんで、じつと襖ふ障子を見つめている。顔には、何の感情も浮んでいない。

所が、ある夜、十五日の総出仕が二三日の中に迫った時の事である。修理は突然宇左衛門をよびよせて、人払いの上、陰気な顔をしながら、こんな事を云った。

「先せん達、佐渡殿も云われた通り、この病体では、とても御奉公は覚おぼつか束ないようじや。ついては、身共もいつそ隠居しようかと思う。」

宇左衛門は、ためらった。これが本心なら、元よりこれに越した事はないが、どうして、修理はそれほど容易に、家督を譲る気になれたのであろう。――

「御ごもつと尤もでございます。佐渡守様もあのように、仰せられますからは、残念ながら、そうなさるよりほかはございますまい。が、まず一応は、御一門衆へも……」

「いや、いや、隠居の儀なら、林右衛門の成敗とは変つて、相談せずとも、一門衆は同意の筈じや。」

修理、こう云つて、苦にがにが々しげに、微笑した。

「さようでもございますまい。」

宇左衛門は、傷しいたまそうな顔をして、修理を見た。が、相手は、さらに耳へ入れる容子ようすもない。

「さて、隠居すれば、出仕しようと思つても出仕する事は出来ぬ。されば、」修理はじつと宇左衛門の顔を見ながら、一句一句、重みを量るはかるように、「その前に、今一度出仕して、西丸の大御所様（吉宗）へ、御目通りがしたい。どうじゃ。十五日に、登城とじょうさせてはくれまいか。」

宇左衛門は、黙つて、眉をひそめた。

「それも、たつた一度じゃ。」

「恐れながら、その儀ばかりは。」

「いかぬか。」

二人は、顔を見合せながら、黙つた。しんとした部屋の中には、油を吸う燈心の音よりほかに、聞えるものはない。——宇左衛門は、この暫くの間を、一年のように長く感じた。佐渡守へ云い切つた手前、それを修理に許しては自分の武士がたたないからである。

「佐渡殿の云われた事は、承知の上での頼みじゃ。」

ほどを経て、修理が云った。

「登城を許せば、その方が、一門衆の不興ふきようをうける事も、修理は、よう存じているが、思うて見い。修理は一門衆はもとより、家来けらいにも見離された乱心者じゃ。」

そう云いながら、彼の声は、次第に感動のふるえを帯びて来た。見れば、眼も涙ぐんでいる。

「世の嘲あざけりはうける。家督は人の手に渡す。天道の光さえ、修理にはささぬかと思うような身の上じゃ。その修理が、今生の望にただ一度、出仕したいと云う、それをこぼむような宇左衛門ではあるまい。宇左衛門なら、この修理を、あわれとこそ思え、憎いとは思わぬ筈じゃ。修理は、宇左衛門を親とも思う。兄弟とも思う。親兄弟よりも、猶なおよ更さらなつかしいものと思う。広い世界に、修理がたのみに思うのは、ただその方一人きりじゃ。さればこそ、無理な頼みもする。が、これも決して、一生に二度とは云わぬ。ただ、今度こんど一度だけじゃ。宇左衛門、どうかこの心を察してくれい。どうかこの無理を許してくれい。これ、この通りじゃ。」

彼は、家老の前へ両手をついて、涙を落しながら、額ひたいを畳たたへつけようとした。宇左衛門は、感動した。

「御手をおあげ下さいまし。御手をおあげ下さいまし。勿体もったいのうございます。」

彼は、修理しゆりの手をとつて、無理に畳から離させた。そうして泣いた。すると、泣くに從つて、彼の心には次第にある安心が、溢あふれるともなく、溢れて来る。——彼は涙なみだの中に、佐渡守の前で云い切つた語を、再びありありと思い浮べた。

「よろしゅうございます。佐渡様が何とおつしやりましたとも、万一の場合には、宇左衛門しわばら 皺腹つかまつを仕れば、すむ事でございます。私一人わたくしひとりの粗忽そこうにして、きつと御登城おさせ申しましょう。」

これを聞くと、修理の顔は、急に別人の如く喜びにかがやいた。その変り方には、役者のような巧みさがある。がまた、役者にならないような自然さもある。——彼は、突然調子はずの外れた笑い声を洩もらした。

「おお、許してくれるか。忝かたじけない。忝いぞよ。」

そう云つて、彼は嬉しように、左右を顧みた。

「皆のもの、よう聞け。宇左衛門は、登城を許してくれたぞ。」

人払いをした居間には、彼と宇左衛門のほかに誰もいない。皆のもの——宇左衛門は、気づかわしように膝ひざを進めて、行燈あんどうの火影ほかげに恐る恐る、修理の眼の中を窺うかがつた。

三 刃傷にんじょう

延享えんきやう四年八月十五日の朝、五つ時過ぎに、修理しゆりは、殿中で、何の恩怨おんえんもない。肥後国熊本の城主、細川越中守宗教ほそかわえつちゆうのかみむねのりを殺害せつがいした。その顛末てんまつは、こうである。

細川家は、諸侯の中でも、すぐれて、武備に富んだ大名である。元姫君もとひめぎみと云われた宗教ねのりの内室うちむねさえ、武芸の道には明あかるかった。まして宗教ねのりの嗜たしなみに、疎おろそな所などのあるべき筈はずはない。それが、「三斎さんさいの末なればこそ細川は、二歳にさいに斬きられ、五歳ごさいごとなる。」と諷うたまれるような死を遂げたのは、完まく時の運まであらう。

そう云えば、細川家には、この凶変きやうへんの起る前兆さきざうが、後のちになつて考えれば、幾つもあった。——第一に、その年三月中旬、品川伊佐羅子いさらごの上屋敷かみやしきが、火事で焼けた。これは、邸内みやうけんに妙見みょうけん大菩薩があつて、その神前の水吹石みずふきいしと云う石が、火災のある毎ごとに水を吹

くので、未^{いまだ}嘗^{かつて}、焼けたと云う事のない屋敷である。第二に、五月上旬、門へ打つ守り札を、魚^{ぎよ}籃^{らん}の愛^{あい}染^{ぜん}院^{いん}から奉^{ほう}つたのを見ると、御武運長久御息災^{ごぶくさい}とある可き所に災の字が書いてない。これは、上野宿^{しゆくぼう}坊^{ぼう}の院代^{いんだい}へ問い合せた上、早速愛染院に書き直させた。第三に、八月上旬、屋敷の広間あたりから、夜な夜な大きな怪火が出て、芝の方へ飛んで行つたと云う。

そのほか、八月十四日の昼には、天文に通じている家来の才木茂右衛門^{さいきもえもん}と云う男が目付^{めつけ}へ来て、「明十五日は、殿の御身^{おんみ}に大変があるかも知れませぬ。昨夜天文を見ますと、将星が落ちそうになって居ります。どうか御慎み第一に、御他出なぞなさいませんよう。」と、こう云つた。目付は、元来余り天文なぞに信を措^おいていない。が、日頃この男の予言は、主人が尊敬しているので、取あえず近習^{きんじゆ}の者に話して、その旨を越中守の耳へ入れた。そこで、十五日に催^{のうき}す能^{ようげん}狂言^{げん}とか、登城の帰りに客に行くとか云う事は、見合せる事になつたが、御奉公の一つと云う廉^{かど}で、出仕だけは止^やめにならなかつたらしい。

それが、翌日になると、また不吉な前兆^{ふきつ}が、加わつた。——十五日には、いつも越中守自身、麻^{あさ}上^が下^{みしも}に着換えてから、八幡大菩薩に、神酒^{みき}を備えるのが慣例になつてゐる。ところが、その日は、小姓^{こしやう}の手から神酒^{みき}を入れた瓶子^{へいし}を二つ、三宝^{さんぼう}へのせたまま受取つ

て、それを神前へ備えようすると、どうした拍子か瓶子は二つとも倒れて、神酒が外へこぼれてしまった。その時は、さすがに一同、思わず顔色を変えたと云う事である。

翌日、越中守は登城すると、御坊主田代祐悦おぼうずたしろゆうえつが供をして、まず、大広間へ通った。が、やがて、大便を催したので、今度は御坊主黒木閑斎かんさいをつれて、湯呑み所じよぎわ際の厠かわやへはいって、用を足した。さて、厠を出て、うすぐらい手水所ちようずどころで手を洗っていると突然後から、誰とも知れず、声をかけて、斬りつけたものがある。驚いて、振り返ると、その拍子にまた二の太刀が、すかさず眉間みけんへ閃ひらめいた。そのために血が眼へはいって、越中守は、相手の顔も見定める事が出来ない。相手は、そこへつけこんで、たたみかけ、たたみかけ、幾いく太刀たちとなく浴せかけた。そうして、越中守がよろめきながら、とうとう、四しの間まの縁えりに仆たおれてしまうと、脇差わきざしをそこへ捨てたなり、慌ててどこか見えなくなってしまった。ところが、伴をしていた黒木閑斎が、不意の大変に狼狽ろうばいして、大広間の方へ逃げて行つたなり、これもどこかへ隠れてしまったので、誰もこの刃傷にんじょうを知るものがない。そ

れを、暫くしてから、漸く本間定五郎と云う小拾人が、御番所から下部屋へ来る途中で発見した。そこで、すぐに御徒目付へ知らせる。御徒目付からは、御徒組頭久下善兵衛、御徒目付土田半右衛門、荻田仁右衛門、などが駆けつける。――殿中では忽ち、蜂の巣を破つたような騒動が出来た。

それから、一同集つて、手負いを抱きあげて見ると、顔も体も血まみれで誰とも更に分ける事が出来ない。が、耳へ口をつけて呼ぶと、漸く微かな声で、「細川越中」と答えた。続いて、「相手はどなたでござる」と尋ねたが、「上下を着た男」と云う答えがあつただけで、その後は、もうこちらの声も通じないらしい。創は「首構七寸程、左肩六七寸ばかり、右肩五寸ばかり、左右手四五ヶ所、鼻上耳脇また頭に疵二三ヶ所、背中右の脇腹まで筋違に一尺五寸ばかり」である。そこで、当番御目付土屋長太郎、橋本阿波守は勿論、大目付河野豊前守も立ち合つて、一まず手負いを、焚火の間へ昇ぎこんだ。そうしてそのまわりを小屏風で囲んで、五人の御坊主を附き添わせた上に、大広間詰の諸大名が、代る代る来て介抱した。中でも松平兵部少輔は、ここへ昇ぎこむ途中から、最も親切に扱つたので、わき眼にも、情誼の篤さが忍ばれたそうである。

その間に、一方では老中若年寄衆へこの急変を届けた上で、万一のために、玄関先

から大手まで、厳しく門々を打たせてしまった。これを見た大手先の大小名の家来は、驚破すわ、殿中に椿事ちんじがあつたと云うので、立ち騒ぐ事が一通りでない。何度目付衆が出て、制しても、すぐまた、海嘯つなみのように、押し返して来る。そこへ、殿中の混雑もまた、益々甚しくなり出した。これは御目付土屋長太郎が、御徒目付おかちめつけ、火の番などを召し連れて、番所番所から勝手まで、根氣よく刃傷にんじょうの相手を探して歩いたが、どうしても、その「上か下みしもを着た男」を見つける事が出来なかつたからである。

すると、意外にも、相手は、これらの人々の眼にはかからないで、かえって宝井宗賀たからいそうがと云う御坊主ごぼうずのために、発見された。——宗賀は大胆な男で、これより先、一同のさがさないような場所場所を、独りでしらべて歩いていた。それがふと焚火たきびの間の近くまの厠かわやの中を見ると、鬢びんの毛をかき乱した男が一人、影のように蹲うずくまっている。うす暗いので、はつきりわからないが、どうやら鼻紙囊ぶくろから鋏はさみを出して、そのかき乱した鬢びんの毛を鋏はさみんででもいるらしい。そこで宗賀そうがは、側へよつて声をかけた。

「どなたでござる。」

「これは、人を殺したで、髪を切っているものでござる。」

男は、しわがれた声で、こう答えた。

もう疑う所はない。宗賀は、すぐに人を呼んで、この男を厠かわやの中から、ひきずり出した。そうして、とりあえず、それを御徒目付の手に渡した。

御徒目付はまた、それを蘇鉄そてつの間へつれて行つて、大目付始め御目付衆立ち合ひの上で、刃傷にんじょうの仔細しさいを問ひ質ただした。が、男は、物々しい殿中の騒ぎを、茫然と眺めるばかりで、更に答えらしい答えをしない。偶々たまたま口を開けば、ただ時鳥ほととぎすの事を云う。そうして、そのあい間には、血に染まつた手で、何度となく、鬢の毛をかきむしつた。——修理は既に、発狂はつきようしていたのである。

細川越中守は、焚火の間で、息をひきとつた。が、大御所吉宗おおごしよ よしむねの内意を受けて、手て負おいと披露ひろうしたまま駕籠かご中の口から、平川口へ出て引きとらせた。公おおやけに死去の届が出たのは、二十一日の事である。

修理しゆりは、越中守が引きとつた後あとで、すぐに水野監物けんもつに預けられた。これも中の口から、平川口へ、青網あおあみをかけた駕籠かごで出たのである。駕籠のまわりは水野家の足軽が五十人、

一様に新しい柿の帷子かたびらを着、新しい白の股引をはいて、新しい棒をつきながら、警固けいごした。——この行列は、監物けんもつの日頃不意に備える手配てくばりが、行きとどいていた証拠として、当時のほめ物になったそうである。

それから七日目の二十二日に、大目付石河土佐守が、上使じょうしに立った。上使の趣は、「其方儀乱心したとは申しながら、細川越中守手疵てきず養生ようじょう不相叶あひかなわず致死しきよいたし去候に付、水野監物宅にて切腹被申もうしつけらるる付者也」と云うのである。

修理は、上使の前で、短刀を法の如くさし出されたが、茫然と手を膝の上に重ねたまま、とうとうとする気色けしきもない。そこで、介錯かいしゃくに立った水野の家来吉田弥三左衛門が、止むを得ず後うしろからその首をうち落した。うち落したと云つても、喉のどの皮一重ひとえはのこっている。弥三左衛門は、その首を手にとつて、下から検使の役人に見せた。頬骨ほおほねの高い、皮膚の黄ばんだ、いたいたい首である。眼は勿論つぶっていない。

検使は、これを見ると、血のにおいを嗅かぎながら、満足そうに、「見事」と声をかけた。

同日、田中宇左衛門は、板倉式部の屋敷で、縛り首に処せられた。これは「修理病氣に付、禁足申付候様にと屹度、^{きつと}板倉佐渡守兼ねて申渡置候処、自身の計らいにて登城させ候故、かかる凶事出来、^{きようじしゆつたい}七千石断絶に及び候段、言語道断の不屈者」という罪状である。

板倉周防守、^{すおうのかみ}同式部、同佐渡守、酒井左衛門尉、^{さゑもん}松平右近将監等、一族縁者が、遠慮を仰せつかったのは云うまでもない。そのほか、越中守を見捨てて逃げた黒木閑齋は、^{ふち}扶持を召上げられた上、追放になった。

修理の刃傷は、恐らく過失であらう。細川家の九曜の星と、板倉家の九曜の巴と衣類の紋所が似ているために、修理は、佐渡守を刺そうとして、誤つて越中守を害したのである。以前、毛利主水正を、^{もつりもんのしょう}水野隼人正が斬つたのも、やはりこの人違いであつた。殊に、^{ちようずどころ}手水所のような、うす暗い所では、こう云う間違ひも、起りやすい。

——これが当時の定評であつた。

が、板倉佐渡守だけは、この定評をよろこばない。彼は、この話が出ると、いつも苦々しげに、こう云った。

「佐渡は、修理に刃傷されるような覚えは、毛頭もうとうない。まして、あの乱心者のした事じや。大方、何と云う事もなく、肥後侯を斬ったのであろう。人達などとは、迷惑至極な臆測じや。その証拠には、大目付の前へ出ても、修理は、時鳥ほととぎすがどうやら云うていたそうではないか。されば、時鳥じやと思つて、斬ったのかも知れぬ。」

(大正六年二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1995（平成7）年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月6日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

忠義

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>